

灯舡

灯舫

古橋桂花

句集 灯 船 定価 七〇〇円

昭和四十三年四月十日印刷

昭和四十三年四月二十日発行

著者 古橋 才次郎

浦和市岸町四一八―一二

印刷所 秀飯舎印刷所

発行所 水明発行所

浦和市岸町四ノ十三ノ八

序

国際云云という厳めしい名称を冠した、別館にしては古びた造りの門を一步入ると、玄関までの敷き石に打ち水がしてあり、低い冬椿にも主人の好みが見え隠れする構えであった。二三人が庭に下りて句作しているその一人は、巨石に腰かけて縁側の方に背を向けていた。詰め襟の服を着た肩の辺りに「海軍さんではないか」と思わせるふしがあった。一日に何度か大本営発表と放送される頃、月に一度水交社に集って平出海軍大佐から話を聞く会があって、平出大佐の他にも二三の士官の姿に馴染んでいたのも、海軍士官の特徴が印象されていた。聞く処によると、桂花さんと平出大佐とは、当時共に大本営の報道部勤務であられ、その後桂花さんは内閣情報局にうつられたそうである。何がきっかけで俳句の道に這入られたか知らないが、根の生えたように巨石に腰かけて居る桂花さんは、熊谷直実が法念上人の念仏の信者になった心境と同じものを持っていられたのかも知れない。それほど石に腰かけて句を詠む桂花さんは孤独にわたくしの瞳に映ったが、思い過ごしである事が解った。旧浦和中学の

桜井汲花先生は茅村、花桶氏等に俳句を教えたと同様、桂花さんも早くより俳句の種を播きつけられ培ぐまれていたというのである。

制帽の紺の色よし青柳

終列車待つ間に吹雪積りけり

既に桂花の号さえあった。江田島在校当時は俳句どころではなかったろう。

暁の富士船長白き服着たり

飛魚に皆片足を舷にかけ

右の二句を得たが、それも後年松の花句会で作句されたものである。面白いことは、氏の句は日常の生活の中からさり気なく詠まれたものが多く、海軍さんの肩から生れたと思う句は殆どない。

秋刀魚買ふ中に妻居る見て帰宅

わが灯にて隣の炭屋炭をひく

蠅叩きさがしに行けば妻の客

繭玉や紅紐を喰む小抽斗

旅立つ日付いて離れぬ夏の風邪

自分などには昔の海軍さんに抱いていた夢を残していたが、氏の俳句からは綺麗さっぱりと夢は消されている。俗に云う太っ腹か非常に小心か、表裏何れともいえる氏の作句をもってこれにあてるのは至当ではないが、桂花さんは私生活を句にする場合、家に在る夫の座、妻の座等を実に明快に皆の眼の前に示される。譬えば秋刀魚の句蠅叩の句の如く。わが身辺を多くは修飾して発表はするが素地のままは出さない。創作を本業としていて貧乏を誇張して書くのを得意とする作家は別として、素となる木地は惜しんで中々見せてくれないものだ。わが家では妻君が魚店の前に立って秋刀魚を買う。又、妻君がお客様と話しこんでいる時、自分は起って蠅叩きを探す、このような些細な事によって、市巷に住む一庶民のあり方が浮き上ってくるのであるが、皆口を噤んでいる。わが沽券にかかわるからであらう。隣りの炭屋だって巳の家だって一つ市民じゃないか、遠慮なくやれ、と氏は自分から電燈のコードを伸して窓近く吊りかえる。だが、こうした方面の句ばかりを得意としているのではない。次に掲げた数句に寧ろ桂花さんらしさがあるとわたくしは思う。

上布着てわれある如くなきごとく

松蟬に座布団折って枕とす

新涼に透きて江戸川大曲り

鞍馬路の暗さ途切れし藤に佇つ

氏が地唄の黒髪を唄うのを聞いたとき、やはり海軍さんは陸軍さんと違っていると思った。わたくしの知った平出大佐も高瀬中佐も、粹人だったからかも知れないが、詰襟の服を着た桂花さんも上布の着心地を知っていられた。座布団を枕にして松蟬に心耳を澄ます一時刻を水の流れの自然さで詠み、江戸川大曲りの辺りに東京を探り、京にあっては鞍馬路を歩いて、藤の花に想いを寄せて居られる。その辺に海軍さんの肩がちらちらする。

句集を出されるについて「自分が老年に近づいたので」といって居られる謙虚さは、お宮仕えをされた氏の長所であろう。が、老年とはまだいえない氏らしい俳句と、陋巷の写生をなおも続けて頂きたいものである。

終りにつけ加えさせて頂く。桂花さんはわたくしの句碑を建てることを発案して下

され、浦和に二つの句碑が建っていることを、この句集と俱にに永久に記念しておきたい。

昭和四十三年二月

長谷川かな女

院の庭斜めに風の糸かかる

昭和二十六年

ぬかるみを前に蛭を売る戸板

通る人今日は多しと垣繕ふ

梅　開　く　蓑　虫　下　る　小　枝　よ　り

木　に　よ　ら　ず　春　雪　庭　に　ま　ば　ら　な　る

薄　き　灯　に　仏　の　貌　の　皆　お　ぼ　ろ

行く雁や断崖に立つ小灯台

雨氣迫りかかりし蝾螈もてあます

投げし石間近に落ちぬ青嵐

青嵐仁王は蹴って出でんとす

暁の富士船長白き服着たり

枝伝ふ蛇につぶての当らざる

掌の中に螢とあるは何の葉か

蛇さげし子にまたついて行く子かな

家計簿に嘘もあるべし火取虫

汗のシャツ皮はぐごとく裏返へす

飛魚に皆片足を舷にかけ

小提灯ゆれてデッキの宴涼し

新涼の夜風ぬくもりある砂に

早稲の香をもって村長句座につく

遠く来し釧路の宿の廊の霧

秋刀魚買ふなかに妻居る見て帰宅

紅白の幕張るもあり菌山

郁子下る窓に秋思の肱冷へぬ

夜学の灯暗し
チョコレートを持つ手あり

草じらみ取ってあげてもよいかしら

山茶花の垣や花びら
翻へし